

水稻の育苗・本田準備について

平成30年産水稻では、発芽不良・生育ムラ・ムレ苗等の相談が多く寄せられ、やや軟弱徒長気味の苗が多く見られました。また、田植え後の本田では、ウキクサ・藻類を含む雑草が多く発生しました。高品質・安定多収のためには、活着が良く旺盛に生育する充実した中苗を育て、雑草の発生を抑えることが重要です。

1 目標とする中苗

育苗日数25〜30日、葉齢3.5〜4.0で草丈18cm前後のがっちりした苗の育成を目指します。

2 計画的な種作業

田植えから逆算して育苗25〜30日、浸種7日を目標に、植付35日前までに準備を済ませます。

(1) 種子の準備

毎年採種ほ産の種籾を購入します。品種固有の特性を発揮する、健全な種籾を使うことが安定多収につながります。病虫害防除のために、温湯消毒か薬剤消毒を必ず行います。

(2) 床土・育苗箱の準備

苗立枯病やムレ苗防止のため、床土及び育苗箱の薬剤消毒を行います。

(3) 浸種

種籾に十分に吸水させ、発芽をそろえるための重要な作業です。

種籾容量の2倍以上の水を用意し、「100℃÷平均水温×日数」を目安に浸漬します(例・平均水温15℃の場合、7日間)。

水温が均一になるように、時々水をかきまわし、種籾に酸素を与えます。

水はなるべく入れ替えないようにしますが、酸素不足となり、泡が発生した場合は、ゆっくりと水を交換します。

薬剤消毒の場合は、消毒液から取り出した後、水洗いせずに浸種し、3日間は水を入れ替えないようにします。

(4) 催芽(芽出し)

種籾の出芽を均一にさせるため、種の前の一晚(12〜20時間)は、種籾を28〜30℃の温水に浸漬し、はと胸(芽が1mmくらい出た状態)にします。

(5) は種(籾振り)

は種量は、薄播きを心がけます。床土を入れ、は種前に育苗箱の底から水がにじむまで十分かん水してからのは種し、覆土します。覆土後のかん水はしません。

積み重ね法による簡易出芽を行う場合には、覆土後、1〜2時間日光で温めてから積み重ね、ビニールで被覆します。

3 育苗管理

(1) 出芽期

幼芽が10mmになるまでは被覆して昼夜30℃を目標に管理します。

(2) 緑化期

幼芽が10mm位になったら苗箱を広げます。苗代かき後、苗床が羊かん程度の硬さになったら、苗箱を苗床に並べ、苗箱を押し付けて床面に密着させます。水は踏切溝までとし、育苗箱の縁上にかからないようにします。

本葉1葉までの3〜4日間は寒冷紗をかけて強光を避け、昼20〜25℃、夜15〜20℃を目標に管理します。

(3) 硬化期

緑化期後、徐々に日光・外気に当て、馴らしします。

4 本田準備

(1) 耕起

麦刈り後に麦藁のすき込みを兼ねて耕起を1〜2回行います。作土層を広げ、水稻の根量を確保するため、耕深は15cmを目標にします。

(2) 代かき

代かきは、碎土を目的とした1回目(荒代かき)と均平や麦株残渣等の埋没を目的とした計2回を目安に丁寧に行います。

5 雑草対策

除草剤を効果的に使用するためには、碎土を十分に行い、均平にすることで、湛水状態を保ちやすくすることが重要です。

湛水土壌処理剤を散布する場合には、ほ場の水の出入りを止めて3〜5cm以上の水深とし、散布後1週間はあまり水を動かさず田面を出さないよう、ゆっくりと差し水をして湛水状態を維持します。

